

会話における修復の特徴と日本語教育

—非明示的な修復に注目して—

千葉 佳奈美 (北海道大学大学院生)

1. はじめに

本稿は、日本語会話教科書(以下、会話教科書)で提示される「聞き返し」と実際の会話における「聞き返し」との違いに注目し、実際の会話における「聞き返し」の特徴を会話分析の視点から明らかにすることを目的とする。

会話が成立するためには、話し手の発話を聞き手が聞き取り、理解する必要がある。しかし、実際の会話の中では、相手の発話が聞き取れない、内容が理解できないなどの問題が発生する可能性が常にある。このような、聞き取りや意味理解の問題に対処するために使われるのが、「聞き返し」である。「聞き返し」は日本語母語話者(以下、母語話者)に比べて日本語能力の劣る日本語学習者(以下、学習者)にとって重要な戦略である。しかし、日本語会話教科書(以下、会話教科書)で提示されている「聞き返し」と、実際の会話に見られる「聞き返し」との間には異なる特徴が見られる。この違いにより、コミュニケーション上の摩擦が発生する恐れがあると考えられる。

本稿では、CallHome Japanese コーパスからとった日本語母語話者同士の会話を会話分析の手法で分析することで実際の会話における「聞き返し」の特徴を明らかにし、「聞き返し」指導に活かすことを目指す。

2. 先行研究

2.1 日本語教育における会話教育の変化

日本語教育において、初めて「聞き返し」に注目したのは尾崎(1992)である。尾崎(1992: 252)は「聞き返し」を「相手の話が聞き取れない・分からないという問題に直面し、それを解消するために相手に働きかける方策」と定義した。尾崎(1993: 251)は、旧来の会話指導の多くは「言いたいことが言えないときに学習者が使う戦略」、すなわち話しての戦略に注目しており、聞き手の戦略である聞き返しはあまり取り上げられてこなかったことを指摘している。

また、中井他(2004)は文法中心の会話教育を批判し、文法的に正確な文を作ることができてもコミュニケーション上の摩擦が発生する可能性があることを指摘している。特に「聞き返し」については「学習者が未習語を聞き返さないため、その後の会話の理解が困難となり、その状況から抜け出そうと唐突に話題転換をしまい、会話の相手を驚かせてしまう」(中井他, 2004: 76)など、対話相手に学習者本人の意志に反する印象を与えてしまう可能性があることを問題視している。中井他(2004)はこのような問題を解決するため、会話教育に談話・会話分析的アプローチを取り入れた指導項目を提案している。

以上のように、会話教育は、文法中心の指導からコミュニケーション上の摩擦を防ぐことを目的とした指導へと変化している。しかし、このような目的で作成された会話教科書で提示されている「聞き返し」には、実際の会話とは異なる特徴が見られ、その違いによってコミュニケーション上の摩擦が発生する可能性があると考えられる。

2.2 会話分析の視点

本稿では、実際の会話における「聞き返し」の特徴を明らかにする目的で、実際の会話資料を分析対象とする、会話分析の手法を取り入れる。

日本語教育では「聞き返し」は「相手の話が聞き取れない・分からないという問題」(尾崎, 1992: 252)を解消するための方策と考えられているが、会話分析では「発話産出・聞き取り・理解にかかわる問題」(Shegloff et al. 1977: 157)に対処するものは「修復の組織」だと考えられている。Shegloff et al. (1977)はトラブルの種類や場所をどれだけ明示的にするかによって他者修復開始に序列があるとしている。その序列は弱いものから順に、以下の通りである。

(1)Shegloff et al. (1977)による他者修復開始のトラブル明示性の序列

- a. 無限定の質問
- b. カテゴリーの限定を伴う質問
- c. 位置の限定を伴う質問
- d. トラブル源の繰り返し
- e. トラブル源を標的に定めた内容質問
- f. 理解候補の提示

上記の修復開始は、弱い修復開始が強い修復開始に優先され、1つのトラブル源に対して複数の修復開始が行われる場合は、弱い修復開始から強い修復開始へと順に行われることが指摘されている。

本稿ではこのトラブル明示性に注目して、会話教科書で提示される「聞き返し」と、コーパスに見られる「聞き返し」を比較して分析を行う。

3. データについて

本稿では、談話・会話分析的アプローチが会話教育に取り入れられ始めた2000年代以降に出版され、周囲と摩擦を起こさずにコミュニケーションができるようになることをねらいとして明記している会話教科書『マンガで学ぶ日本語会話術』(2006)を分析対象とした。

また、会話データはCallHome Japanese コーパスから引用した。CallHome Japanese コーパスは、北米に住む日本人が日本に住む家族へ電話した会話を録音したものである。

4. 分析

まず、会話教科書に見られる「聞き返し」の例を挙げる。

(2)会話教科書に見られる「聞き返し」

01¹ A:きのう、フリマに行ってきたんだ。

02→ B:フリマって何ですか。

03 A:フリーマーケットのことだよ。

(金子他, 2006: 27)

(2)では、Aの01行目の発話の中の「フリマ」という語が、Bにとってトラブル源となった。02行目でBはトラブル源を「～って」という引用の形式を用いて繰り返すことでトラブル源を特定し、「何ですか」と疑問詞を用いた質問の形式によって意味理解のトラブルが発生していることを示す修復開始を行っている。(2)における02行目のBによる「聞き返し」は、トラブル源とトラブルの種類を明示する(1e)にあたり、明示性の高い修復開始である。このような「聞き返し」は会話教科書で頻繁に見られる。

一方、実際の会話では、トラブルは必ずしも明示的に示されるわけではない。以下に示す断片では、アメリカに住む息子と見られるヤスオと、日本に住む母親とみられるヨシコが電話で話しており、ヤスオはヨシコの手元にある電話帳に載っている知人の住所について話している。

(3)はっきり理解を示さない反応による修復開始

01 ヤスオ² だからそこには書いてないと思うんやわ。

02 (0.4)

¹ 行数は発表者による。

² 話している人物や会話に登場する人物の名前、およびその他の固有名詞はすべて仮名である。

- 03→ヨシコ ん::ん
 04 ヤスオ =こないだはがき来ただけから?
 05 (0.5)
 06→ヨシコ ふ::ん

(CallHome Japanese 0856)

(3)では、01行目、04行目のヤスオの説明に対して、それぞれ03行目、06行目でヨシコがやや上昇音調で継続子を用いて応えている。03行目、06行目のヨシコの発話は明示性の低い修復開始だと考えられる。

ヤスオが「だからそこには書いてないと思うんやわ:。」(01行目)とヨシコに説明をしたあと、0.4秒の短い間をあけて、ヨシコは「ん::ん」(03行目)と継続子の形式を用いてやや上昇音調で応じている。これは問題がないことを示すときのヨシコの反応と比較して、音が引き延ばされ、末尾がやや上昇音調であることから、はっきりと理解したことを示していない反応だと言える。03行目のヨシコのあいまいな反応を受けて、間を空けずに04行目でヤスオはさらに説明を追加する。これはヨシコの03行目の反応がはっきりと理解を示さないものであったことから、ヤスオが追加の説明が必要だと判断したためだと考えられる。04行目のヤスオの説明のあと、再度短い間をあけて、06行目でヨシコは再び継続子の形式を用いてやや上昇音調で応えている。

03行目、06行目のヨシコの反応は、01行目、04行目のヤスオの情報提供に対してははっきり理解を示さず、曖昧な反応をすることで、トラブル発生を暗に示していると考えられる。これはトラブル源もトラブルの種類も明示せず、何らかのトラブルが発生していることだけを示す修復開始だと言える。これは相手に答えを求める質問の形式をとっていないため、(1a)よりもさらに明示性の低い修復開始だと考えられる。

続く(4)では、ヨシコが「なみかわえい」という人物が誰かわからずにヤスオに質問している。しかし、実際は「なみかわえい」が人名であるというのはヨシコの勘違いで、ヤスオは知人が「なみかわ」という地名の場所へ引っ越したことについて話していたため、理解の齟齬が発生している。

(4) トラブルの内容と直接無関係な質問による修復開始

- 01→ヨシコ なみかわえいっていうのははがきが来てたの?
 02 (0.9)
 03 ヤスオ ん:
 04 (0.5)
 05 ヤスオ あの::結婚しましたゆうて:
 06 (0.6)
 07 ヨシコ ふん.
 08 (0.6)
 09 ヤスオ あの::[::
 10→ヨシコ [お二人とも?

(CallHome Japanese 0856)

(4)では、まずヨシコが01行目で「なみかわえい」について質問することで修復を開始している。この質問に対して、ヤスオは05行目で、ヨシコの発話の「なみかわえい」については無視し、知人から結婚を知らせるはがきが届いていたという情報を述べることで答えている。ヤスオは09行目で何かを言いかけるが、それを遮ってヨシコが10行目でさらに「お二人とも?」と、先に話題になっていた知人と「なみかわえい」の2人から結婚を知らせるはがきが届いていたのかを問う質問をしている。

01行目でヨシコは「なみかわえい」というトラブル源を「っていうのは」という引用形式を用いて繰り返すことで明示し、トラブル源を特定している。ここでヨシコに発生しているトラブルは、「なみかわえいとは誰か」という内容理解に関するトラブルである。しかし、ヨシコはこれを直接的な質問によってヤスオに聞くことはせず、「はがきが来てたの?」(01行目)と周縁的な情報を求める質問によってトラブルを解消しようとしている。続く10行目のヨシコの「お二人とも?」という質問も01行目と同様である。これらの質問は、表面的にはトラブル源を特定し、トラブルの内容を明示する明示性の高い(1e)の形式による修復開始に見えるが、実際に発生しているトラブルとは直接関係のない、間接的な質問をすることで、トラブルを解消しようとする修復開始だと言える。

5. おわりに

本稿では、日本語教育において、コミュニケーション上の摩擦を軽減することを目的に、談話・会話分析的アプローチを取り入れた会話教育が注目されるようになったものの、会話教科書における「聞き返し」と、コーパスによる会話データに見られる「聞き返し」との間には異なる特徴があることを指摘した。

会話教科書ではトラブル源を特定し、トラブルの種類を明示する、明示性の高い「聞き返し」が提示されていたのに対し、コーパスによる会話データでは、はっきりと理解を示さない継続子の形式によって暗にトラブルの発生を示す「聞き返し」や、トラブル源は示しながらも、直接的な質問を避け、間接的な質問によって問題を解消しようとする「聞き返し」が見られた。また、会話教科書では1回の「聞き返し」によって問題が解消していたのに対し、コーパスによる会話データでは1つのトラブルに対して複数回の「聞き返し」が行われていた。会話教科書では、トラブル明示性の高い「聞き返し」を行うことで、より少ない回数で「聞き返し」によって効率よく問題を解消することが推奨されるのに対し、実際の会話では、トラブル明示性の低い「聞き返し」が行われることで、結果として複数回の「聞き返し」が行われることも珍しくない。

会話教科書では、「聞き返し」を指導項目として提示する際、単独の言語行為として会話の中から取り出して提示する傾向にある。しかし、「聞き返し」は、会話の中で相手の発話に対して問題が発生した際に、その問題を解消するために用いる戦略である。したがって、会話の中で聞き返しが単独で現れることはなく、必ず、依頼や誘い、エピソード語りなど、他に進行している会話の内容があり、それに対して「聞き返し」が行われる。会話教科書で提示される「聞き返し」は問題の解消を最優先にするため、トラブル明示性の高い「聞き返し」によって、できるだけ少ない回数で効率よく問題を解消することを推奨していると考えられる。しかし、実際の会話では問題の解消よりも、依頼や誘いなどの会話の内容を先に進めることが優先される場合もあり、常に効率のよい問題解消が求められているのではない。会話教科書に提示されているトラブル明示性の高い「聞き返し」は、進行している会話の流れを不自然に断ち切ってしまう恐れがあり、会話教育のコミュニケーション上の摩擦を軽減するという目的を妨げる可能性がある。したがって、トラブル明示性の高い聞き返しだけでなく、実際の会話に見られるトラブル明示性の低い「聞き返し」の指導も取り入れることを提案する。

トランスクリプト記号一覧

[会話の重なるの始まる点
(数字)	0.1秒単位で数えた間合いの長さ
=	発話と発話が途切れなくつながっている
.	下降イントネーション
?	上昇イントネーション
∩	半疑問イントネーション
:	音の伸ばし(数は音の相対的な長さに対応している)

参考文献

- 金子史朗, 黒川美紀子, 深田みのり, 宮下智子 (2006). マンガで学ぶ日本語会話術. アルク.
- 中井陽子, 大場美和子, 土井眞美 (2004). 談話レベルでの会話教育における指導項目の提案—談話・会話分析的アプローチの観点から見た談話技能の項目 世界の日本語教育 14, 75-91.
- MacWhinney, B. (2007). The talkbank project. In *Creating and digitizing language corpora*, 163-180.
- 尾崎明人 (1992). 「聞き返し」の戦略と日本語教育 日本語研究と日本語教育, 251-263.
- 尾崎明人 (1993). 接触場面の訂正戦略——「聞き返し」の発話交換をめぐって(中間言語研究〈特集〉) 日本語教育, 81, 19-30.
- Schegloff, E. A., Jefferson, G. & Sacks, H. (1977). The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation, *Language*, 53(2), 361-382.